

夢湧く夢に夢中

第17号

令和8年3月6日 文責：大谷

今から遡ること三十四年前。広島県でサッカーのアジアカップという大会が開催された。当時、日本にはまだサッカーのリーグはなく、この頃の日本代表と言えば、ワールドカップ出場経験は無くアジアでも勝てない「弱小チーム」だった。しかし、カズこと三浦知良らを擁した今大会の日本代表チームは快進撃を続け、見事初優勝を飾った。翌年にJリーグ開幕を控えていた日本国内にサッカー熱が一気に広がり、ワールドカップ出場も現実味を帯びてきたと思わせてくれた年だったことを思い出す。

この大会のピッチ(サッカーのグラウンド)に現サッカー日本代表監督の森保一(はじめ)氏が選手として立っていた。小柄で細身な体格。ポジションも華美な攻撃陣ではない守備的な位置に配されていたこともあり、あまり目立つ選手ではなかった。だから、試合の度に脚光を浴びるのは専らカズやラモス瑠偉、中山雅史、武田修宏らであり、森保選手がマスコミに取り上げられたり、ましてや MVP のような賞をもらったりすることは皆無だった。

しかし、この大会の決勝戦の直前、森保選手は数名のカメラマンからグラウンドの隅に手招きされた。

「俺たちがつくった何の威厳もない賞だけど、受け取ってくれないか」

そう言いながら差し出されたのは、森保選手の写真が飾られたオルゴールだった。

「きみは何一つ賞をもらうことはなかったけど、きみが真の MVP であることは俺たちが一番よく知っている。だから、ほんの心尽くしと思って受け取って欲しい」

カメラマンたちは試合中常にボールをファインダー

南阿蘇中の真骨頂

越しに追いかけている。すると、フレームの中に必ずと言っていいほど「背番号17(森保選手)」が現れては消え、消えてはまた現れていたという。

「チームのために最も献身的に働いていた」

数々の試合を追いかけてきたプロのカメラマンたちが一様にこう評価した。他のどんな賞にも勝る最高の賞と言える。

そんな現役生活を送ってきた森保氏が監督として指揮している「森保 JAPAN」にも、この DNA はしっかり受け継がれている。今の日本代表は三十年前と比べ、久保建英や上田綺世、熊本出身の谷口彰悟など海外でプレーするスター選手ばかりで実に華々しい。しかし、そんなスター選手たちでさえ一切手を抜かず献身的にボールを追いかけて、体を張ってボールを奪いに行く。もし三十四年前、森保選手にオルゴールを渡したカメラマンらが現在の日本代表を見たら、誰にそれを渡そうか迷うはず。三数十年を経て、これこそが日本サッカーの真骨頂である。

リーダーとして先頭に立ってみんなを引っ張ったり、時には後ろから仲間の背中を押ししたりしながら献身的に南阿蘇中学校を支えてくれた三年生が、明日卒業式を迎える。特に体育大会や合唱コンクール等での主体的な活動をはじめ、あつまりん祭や子ども議会で見せた地域貢献への強い思いは、今でも胸を熱くする。そんな三年生らの日々を、もしプロのカメラマンがファインダー越しに追いかけていたら、間違いない全員がフレームの中に現れていたことだろう。「誰かのために献身的に働いていれば、必ず誰かが見てくれている」そんな南阿蘇中の真骨頂を築いてくれたことは言うまでも無い。だから、この精神をこれからも強く心に秘めて、堂々と踏み出して欲しい。卒業おめでとう。

■卒業生の保護者の皆様、お子様のご卒業誠にありがとうございます。また、三年間、本校の教育活動に多大なご理解とご協力をいただき、心より感謝申し上げます。職員一同これからも卒業生らの活躍を応援してまいりますので、引き続きお力添えをよろしくお願い申し上げます。三年間ほんとうにありがとうございました。